

遭難事故のこと

文・小西 一三
 絵・小西 由紀子

普

段は波も静かで多くの恵みを与えてくれる八郎潟ですが、強風が吹くと一転して大波が立ち、船は風と波にもまれ、多くの漁師さんたちの命を奪いました。干拓で狭くなったとはいえ、強風が吹けばその恐さは相変わらず。羽立の漁師、安田安範さん(73)にお聞きしました。

台風が来る時は学校を早引きして、
 建網を上げに行つたもんだ

俺

の親父も潟の漁師で名前は安蔵。九十二歳で亡くなったも、七十歳の頃まで俺と一緒に漁に出ていた。俺は子どもの頃から漁の手伝いをさせられ、今まで潟の漁師一筋。小学校、中学校に通っていたらだつて漁を手伝っていた。だつて、親父は学校まで電話をかけてくるもんだもの。「台風来るから建網揚げる。今すぐ帰つて来い」。その頃は子どもだつて貴重な働き手だ。授業中でも先生たちは許してくれた。学校から急いで帰り、親父と一緒に船に乗って建網に向かつたもんだ。

俺が乗つた頃はすでに小さいエンジンを乗せていたから櫓を漕いだという経験はなし。だども、エンジンはなかなかからなくてな。かかるまで、必死になつて回したもんだ。

あの頃は漁もあつたし、魚の値段も良かったから田んぼなんて7反しかねがつたも、十分生活はできたな。俺は中学校を卒業してから金足農業の定時制に入ったも、漁が忙しくて二年で辞めてしまった。学校の勉強するよりも、親父と潟に出て魚獲つてる方がおもしろかつたし、稼がねばならぬえという気持ちが強かつたからな。

漁

は建網(注1)、うたせなど、その頃潟でやっていた漁はほとんどやった。ただし、氷下漁だけはやったことはねえ。今はシラウオやワカサギ(注2)はドツピキだも、俺が中学校を卒業した頃はまだうたせだつた。網に結ぶ網の長さ、船の流し方など、全部、親父に教えてもらった。だども風が吹かねば船は動かね。そうなればお手上げだ。

ただし、この風がくせ者だ。適度に吹けばいいも、強風になれば大変だ。漁師はみんな天気予報には気を付けていたも、時として予想もしねえ風が吹いたり、雪が降つてくることもある。

俺は三十年ほど前の夏、台風の吹き戻しの強烈な風で船が昭和町の堤防の方まで流され、船が転覆。遭難事故を経験した一人なんだ。



「ほら、上から延ばすこのロープ。長さの調整が難しくでな」と指さす

(注1)「うたせ」 「うたせ網漁」の略。船に帆を上げ、風を利用した曳き網漁法。高度な技術が必要とした。
 (注2)「ドツピキ」二隻の動力船で網を曳く、曳き網漁法。この漁法の普及により、「うたせ網漁」は姿を消した。